

ブラジル・ポルトガル語を母語とする日本語学習者における「結果残存のテイルNがある」の使用に関する一考察

UM ESTUDO SOBRE COMO OS FALANTES DE PORTUGUÊS DO BRASIL ESTUDANTES DE JAPONÊS UTILIZAM A ESTRUTURA “TEIRU N GA ARU”

A STUDY ABOUT HOW BRAZILIAN-PORTUGUESE SPEAKERS LEARNING JAPANESE USES THE STRUCTURE “TEIRU N GA ARU”

Julia Toffoli¹

ORCID iD: <https://orcid.org/0000-0002-5875-4361>

Recebido em 15/04/2020

Aceito em 05/05/2020

要旨：日本語で「結果残存のテイル」とブラジル・ポルトガル語（以下BP）の「estar＋過去分詞」は基本的に対応する。そのため、「結果残存のテイル」は比較的習得が困難ではないと思われるが、日本語母語話者が「結果残存のテイル」を使用しているのに対して、BPを母語とする日本語学習者（以下BPS）が「ついている電気がある」のような「結果残存の「テイルNがある」」を使用している場合がある。これはBPにおける不定冠詞の影響だと思われる。この現象を確認するため本研究ではBPSを対象とし、アンケート調査と文法性判断調査を通して、その特徴を提示した。その結果、不定冠詞がつく場面では「結果残存の「テイルNがある」」の使用が見られ、母語の影響があることが考えられる。

キーワード：ブラジル・ポルトガル語、結果残存のテイル、冠詞、母語の影響

ABSTRACT: *The Japanese resultative structure teiru corresponds basically to ‘estar + past participle’ in Brazilian Portuguese (BP). For this reason, we can state that for Brazilian learners (BPS) the resultative teiru is not difficult to master. However, in some situations, while Japanese native speakers use the resultative teiru, BPS uses “teiru noun ga aru”; e.g. “tsuiteiru denki ga aru”. I believe this occurs due to BP influence by the use of indefinite articles. To confirm this hypothesis, in this study I have analyzed the possible causes and presented its features through the results of a questionnaire survey and grammatical judgment test applied to BPS. As a result, in situations where the indefinite article is attached, we can observe the use of “teiru noun ga aru”, which may be due to the influence of mother tongue.*

Keywords: *Brazilian-Portuguese. Resultative teiru. Articles. Mother tongue influence.*

¹ サンパウロ大学日本語科卒業。一橋大学言語社会研究科修士課程修了。同学博士課程在学中。e-mail: toffoli.julia@gmail.com

1 はじめに

これまでのテイルの習得の先行研究では、「進行中」と「結果残存」の2用法のうち「結果残存」は習得が困難だとされている(黒野1995)。ブラジル・ポルトガル語(以下BP)には対応する形式があるため、BPを母語とする日本語学習者(以下BPS)にとってはテイルの習得は困難ではないと思われるが、現場では以下のようなテイルの使用が見られる。

- (1) ついでいる電気がある。
- (2) 死んでいる犬がいる。

要するに、状態描写に対して、BPSにとっては「Nが結果残存のテイル」の他に「結果残存の「テイルNがある」」を使用する場合がある。

本稿ではBPSにおける「死んでいる犬がいる」のような「結果残存のテイル+Nがある・いる」(以下「テイルNがある」)の使用を考察し、母語がどのように影響するか検討する。

2 先行研究

テイルの習得について、これまで多くの研究がなされてきた。テイルとアル/イルの関係について、陳(2009)は、日本語母語話者(以下NS)と中国語を母語とする日本語学習者(以下CS)の「結果残存のテイル」と「アル・イル」の使用傾向の違いに注目し、どのような種類の「結果残存のテイル」が「アル・イル」との使い分けで問題になるのかを調査を通して提示した。その結果、CSにとって「移動」を表す動詞の「結果残存のテイル」は、「変化の結果の持続」というより、むしろ「存在」のほうに近い。そのため、「移動」を表す動詞の「結果残存のテイル」が非用となる可能性があることが分かる。

陳(2009)を踏まえた上で、庵(2010)は「結果残存」に二つの種類があると述べている。一つは、例えば「財布が落ちている」のテイルは財布が落ちた結果、財布は道に「存在」することになるという意味を表している。それに対して、「電気がついでいる」のようなテイルの使用にはそのような関係は見られないという。そのため、前者のタイプは「存在形」、後者のタイプは「非存在形」と呼ばれている。

トッフオリ(2019)ではアンケート調査と文法性判断調査を通してBPSにおける「結果残存のテイル」の習得傾向の考察がなされている。日本語における「結果残存のテイル」とBPの「estar (be)+過去分詞」が基本的に対応するため「結果残存」は相対的に習得が困難ではないが、BPSのテイルの使用に関してはBPにおける冠詞の影響が考えられるという。NSが「結果残存のテイル」を使用しているのに対して(3)、BPSが母語における不定冠詞の影響でテイルの代わりにアル・イルを使用している(4)。

(話し手が落ちている財布を発見して)

- (3) あ、あそこに財布落ちている。
- (4) あ、あそこに財布がある。

これらの例文をBPで考えると、不定冠詞がつく場面であることが分かる。

- (3) Tem uma carteira caída ali.
ある 不定冠詞 財布 落ちる(過去分詞) あそこ

(4) Tem uma carteira ali.

ある 不定冠詞 財布 あそこ

BPではどちらの例文も自然であるが、BPSは「財布が落ちている」より「財布がある」と言いがちであることを報告されている。それは、BPで不定冠詞を用いる文であれば、存在を表す「estar」ではなく、日本語のアルに当たる「ter」が使われるため、テイルよりアルにしてしまうと指摘されている。

またBPでは、定冠詞を用いる文でも、動詞によっては、動詞を表す過去分詞の「結果残存のテイル」を省略しても、アル・イルだけで表現したいことが伝わるため、テイルの非用が見られる。しかし、文法性判断調査の結果から、定冠詞がつく場面のみ、テイルの代わりにアル・イルの使用だけではなく、タ形の使用も同じ平均で見られると報告されている。

このように、存在形のテイル(庵2010)の使用は現象としてBPと中国語は重なるが、BPSの発言では(1)と(2)の「テイルNがある」のような非存在形のテイルにアルがつく言い方も見られ、さらに検討する必要があると思われる。

3 「テイルNがある」の使用とBPにおける不定冠詞との関係

日本語の結果残存のテイル形式に対して、BPではestar+particípio (estar+過去分詞) が用いられる。

(5) A janela está aberta. (窓が開いている)

定冠詞 窓 be (現在形) 開く (過去分詞)

BPには、日本語における主体変化動詞のような動詞の分類はないが、(5)の形式は変化後の結果の継続を表すため、変化の概念を含まない動詞としては用いられにくい(儀保2014)。さらに、結果残存を表す形式「estar+過去分詞」の「estar」という動詞の一つの主な用法は、動くことの出来る、あるいは動かすことのできる生き物・物などの一時的な存在を表す場合に用いられる(彌永2011)。

(6) O gato está em cima do telhado. (猫は屋根の上にいる)

定冠詞 猫 be に 上 の 屋根

また、不定冠詞を用いる文であれば、一時的な存在を表す「estar」ではなく、存在の位置か所有を表す「ter」が使われる。

(7) Tem um gato em cima do telhado. (屋根の上に猫がいる)

アル不定冠詞 猫 に 上 の 屋根

さらに、状態描写の場合でも同じ定・不定冠詞と「estar/ter」の関係が見られる。

(8) A sua caneta está caída ali. (あなたのペンはあそこに落ちている)

定冠詞あなたのペン be 落ちる(過去分詞) あそこ

(9) Tem uma caneta caída ali. (あそこにペンが落ちている)

アル 不定冠詞 ペン 落ちる(過去分詞) あそこ

日本語で「結果残存のテイル」とBPの「estar+過去分詞」は基本的に対応するが、定・不定冠詞によって存在を指す動詞が変わる (estar/ter)。また、動詞によって(8)と(9)で分かるように、日本語ではハとガの違いも目立つ。

寺村(1982)で取り上げられているように、存在表現に関しては、新情報・旧情報と定冠詞・不定冠詞の関係は英語でも見られる。

(10) The pen is over there. ペンはあそこにある

ここではX(ペン)は既知のもので、その場所Yが新情報であるため、Xはハをとり、英語ではペンの前に定冠詞が置かれる。

(11) There is a pen over there. あそこにペンがある

ここでは、場所の方が既知であり、存在するものが新情報であるため、X(ペン)はガをとり、英語ではペンの前に不定冠詞が置かれる。

しかし、Hinds(1986)で述べられているように英語は存在より所有に焦点を当てるため、状態描写に関しては、英語は(8)の英訳の(12)より、所有表現を持つ(13)を好むと言えるだろう。

(12) (?) The pen is fallen over there.

(13) Your pen is fallen over there.

また、「There is」構文に関しては、(14)の現在分詞を用いられるが、過去分詞の場合、(15)より能動文の(16)の方が好まれると言えるだろう。

(14) There is a man walking on the street. 道を歩いている男がいる。

(15) (?) There's a pen fallen over there. あそこに落ちているペンがある。

(16) Someone dropped a pen over there. 誰かあそこにペンを落としました。

ロマンス語は英語と同じようにHinds(1986)の言う「人間中心言語」で、能動文を好むとは言えるが、BPは、(9)のように不定冠詞を用いる場面によって、日本語のように「状況中心言語」な要素もあり、「不定冠詞・ある」のような静的な関係もある。しかし、日本語では(1)と(2)は自然だと言えるだろうか。日本語においては状態描写により何かを制限するか特定するとき「テイルNがある」の使用は自然な場合もあるが、形式名詞「の」の方が採択されやすい。

- (17) (コップセットの箱を開けて、一つのコップが割れていることに対して)
あ、割れているのがある。いやだな。

要するに、NSにとっては場面によって自然・不自然だと思われる場面に対してBPSにとっては母語の影響で「テイルNがある」はどんな場面でも自然であると思われる。この現象を確認するために調査を行った。

4 調査

BPSとNSは同じ場面で「テイルNがある」を使用するかどうか確認するために指示した場面に発話を自由に記入してもらうアンケート調査を行った。提示した各場面はBPで「ter+不定冠詞+動詞（過去分詞）」（cf. “tem uma luz acesa”）を用いやすい状況を狙った。次に、BPSとNSにとって「テイルNがある」の許容度を確認するためにアンケート調査と文法性判断調査を行った。

4-1 アンケート調査の概要

調査は陳(2009)の調査をモデルにし、2015年8月から9月にかけて実施した。NS 35名とブラジル（サンパウロ）のある一般人向けの日本語学校のBPS71名（日本語能力試験N4レベル以上：N1-7名、N2-7名、N3-20名、N4-37名、以下N1, N2, N3, N4）を対象として、提示した場面に発話を記入してもらう形で行った。母語でどのように考えているのかが分かるように、同じ問題を日本語だけでなく、BPでも（別の質問紙で）答えてもらった。また、カウンターバランスを取るために、BPで書かれている質問紙（以下BP版）で行ってから、日本語で書かれている質問紙（以下日本語版）で行う組と日本語版で行ってからBP版で行う組に分けて行った。

4-2 アンケート調査の結果

以下の図1～4は調査で用いた問題である。表1～4はそれぞれの日本語版とBP版の問題の結果である。表中のBはBPSを表す。N1/N2/N3/N4はそれぞれBPSの日本語能力試験の合格級である。「自/他動詞+テイル」の回答は自他関係を問わずテイル形に含めて合計したが、テアル形を用いた回答は別に計算した。

【問題1】

あなたはコップのセットを買いました。箱を開けたら...

あなた：あっ！ _____



Você comprou um jogo de copos. Ao abrir a caixa...

Você: Ah! _____.

<図1 調査で用いた図（問題1）>

<表1 問題1の調査結果>

日本語版	NS (35名)	B (71名)	BN1 (7名)	BN2 (7名)	BN3 (20名)	BN4 (37名)
テイル形	30 (85.7%)	37 (52.1%)	7 (100%)	5 (71.4%)	11 (55%)	14 (37.8%)
テアル形	0	1 (1.4%)	0	0	0	1 (2.7%)
テイルNがある	2 (5.7%)	0	0	0	0	0
タ形	0	23 (32.4%)	0	2 (28.5%)	7 (35%)	14 (37.8%)
その他	3 (8.5%)	10 (14%)	0	0	2 (10%)	8 (21.6%)

BP版	B (71名)	BN1 (7名)	BN2 (7名)	BN3 (20名)	BN4 (37名)
テイル形	36 (50.7%)	3 (42.8%)	2 (28.5%)	12 (60%)	19 (51.3%)
テアル形	0	0	0	0	0
テイルNがある	29 (40.8%)	4 (57.1%)	4 (57.1%)	7 (35%)	14 (37.8%)
タ形	5 (7%)	0	0	1 (5%)	4 (10.8%)
その他	1 (1.4%)	0	1 (14.3%)	0	0

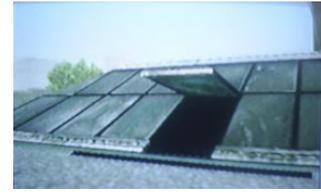
問題1の日本語版ではNSとBPSの多くはテイル形（コップが割れている）を使用している。また、数が少ないが、NSの中では「割れているのがある」のような「テイルNがある」型を用いる例もあった。これに対して、BP版ではテイル形（“um copo (es)tá quebrado”）と「テイルNがある」（“tem um copo quebrado”）を使用している数の間にはあまり差がない。

【問題2】

あなたは会議室の準備をしています。

同僚：窓は全部閉まっているよね？

あなた：えっと、あっ！見て_____



Você está arrumando a sala de reuniões.

Colega: As janelas estão todas fechadas né?

Você: Hmm...Ah, olha! _____

<図2 調査で用いた図（問題2）>

<表2 問題2の調査結果>

日本語版	NS (35名)	B (71名)	BN1 (7名)	BN2 (7名)	BN3 (20名)	BN4 (37名)
テイル形	28 (80%)	50 (70.4%)	7 (100%)	6 (85.7%)	13 (65%)	24 (64.8%)
テアル形	0	2 (2.8%)	0	0	2 (10%)	0
テイルNがある	1 (2.8%)	2 (2.8%)	0	0	1 (5%)	1 (2.7%)
その他	6 (17.1%)	17 (23.9%)	0	1 (14.3%)	4 (20%)	12 (32.4%)

BP版	B (71名)	BN1 (7名)	BN2 (7名)	BN3 (20名)	BN4 (37名)
テイル形	18(25.3%)	4 (57.1%)	1 (14.3%)	0	13 (35.1%)
テアル形	0	0	0	0	0
テイルNがある	45 (63.4%)	3 (42.8%)	6 (85.7%)	17 (85%)	19 (51.3%)
その他	8 (11.2%)	0	0	3 (15%)	5 (13.5%)

問題2の日本語版ではNSとBPSの多くはテイル形を使用している。数は少ないが、NSでもBPSでも「テイルNがある」（開いている窓がある）を用いる例もあった。BP版では「テイルNがある」（“tem uma janela aberta”）を使用している数が圧倒的に多い。

【問題3】

あなたは遅くまで残業しました。同僚と会社を出たら...

同僚：ああ、遅いね。会社のみんなはもう帰っているでしょう。

あなた：そうね。あっ、でもあそこ見て。_____



Você e seu colega ficaram até bem tarde trabalhando.

Você: Nossa já está tarde né? Todos já devem ter ido embora.

Colega: É mesmo né. Ah, mas olha ali. _____

<図3 調査で用いた図（問題3）>

<表3 問題3の調査結果>

日本語版	NS (35名)	B (71名)	BN1 (7名)	BN2 (7名)	BN3 (20名)	BN4 (37名)
テイル形	17 (48.5%)	18 (25.3%)	4 (57.1%)	3 (42.8%)	3 (15%)	8 (21.6%)
テアル形	0	4 (5.6%)	1 (14.3%)	0	0	2 (5.4%)
テイルNがある	10 (28.5%)	6 (8.4%)	0	0	2 (10%)	4 (10.8%)
人がいる	4 (11.4%)	25 (35.2%)	2 (28.5%)	1 (14.3%)	9 (45%)	13 (35.1%)
その他	4 (11.4%)	18 (25.3%)	0	3 (42.8%)	6 (30%)	9 (24.3%)

BP版	B (71名)	BN1 (7名)	BN2 (7名)	BN3 (20名)	BN4 (37名)
テイル形	2 (2.8%)	2 (28.5%)	0	0	0
テアル形	0	0	0	0	0
テイルNがある	38 (53.5%)	2 (28.5%)	5 (71.4%)	8 (40%)	23 (62.1%)
人がいる	13 (18.3%)	3 (42.8%)	1 (14.3%)	5 (25%)	4 (10.8%)
その他	18 (25.3%)	0	1 (14.3%)	7 (35%)	10 (27%)

問題3の日本語版ではNSの多くはテイル形を使っているが、「帰っていない人があ
る」のような「テイルNがある」を使用している。また、BPSの多くは「人がいる」
を使用しており、「ついている電気がある」を使用している例も見られる。BP版で
は「テイルNがある」（“tem uma luz acesa ali”）を使用している数が圧倒的に多い。

【問題4】

あなたは車を運転しています。前を見たら...車を止めて

あなた：あ！_____。かわいそう...



Você está dirigindo. Ao olhar para frente você percebe que tem alguma coisa na pista e para o carro.

Você: Ah!_____. Tadinho...

<図4 調査で用いた図（問題4）>

<表4 問題4の調査結果>

日本語版	NS (35名)	B (71名)	BN1 (7名)	BN2 (7名)	BN3 (20名)	BN4 (37名)
テイル形	27 (77.1%)	15 (21.1%)	6 (85.7%)	2 (28.5%)	2 (10%)	5 (13.5%)
死んだ系	1 (2.8%)	34 (47.8%)	0	0	12 (60%)	22 (59.4%)
死んだ犬だ	0	3 (4.2%)	1 (14.3%)	0	1 (5%)	1 (2.7%)
タNがある	0	4 (5.6%)	0	1 (14.3%)	0	3 (8.1%)
その他	7 (20%)	15 (21.1%)	0	4 (57.1%)	5 (25%)	6 (16.2%)

BP版	B (71名)	BN1 (7名)	BN2 (7名)	BN3 (20名)	BN4 (37名)
テイル形	8 (11.2%)	2 (28.5%)	1 (14.3%)	2 (10%)	3 (8.1%)
死んだ系	8 (11.2%)	0	0	2 (10%)	6 (16.2%)
死んだ犬だ	6 (8.4%)	1 (14.3%)	1 (14.3%)	1 (5%)	3 (8.1%)
テイルNがある	13 (18.3%)	3 (42.8%)	1 (14.3%)	3 (15%)	7 (18.9%)
その他	36 (50.7%)	1 (14.3%)	4 (57.1%)	12 (60%)	19 (51.3%)

問題4の日本語版ではNSは殆どテイル形を使用しているが、BPSの多くは死んだ系（犬が死んだ）を使用している。また、数少ないが、テイルの代わりにタ形を用いる「死んだ犬がある」のような例も見られる。BP版では多くのBPSは「犬は車に轢かれた」（“o cachorro foi atropelado”）を使用しているが、「テイルNがある」（“tem um cachorro morto ali”）の使用も見られる。

4-3 アンケート調査の結果の分析

アンケート調査ではテイル形の使用が多かったが、BPの直訳で「ついている電気がある」のような「テイルNがある」の表現を選ぶ例もあった。さらに、「死んだ犬がある」のような「タNがある」という形も見られた。

レベル別の結果を見ると、問題1では「テイルNがある」の使用はなく、N1, N2レベルのBPSの多くはテイル形を使用しているのに対して、N3, N4レベルのBPSはほとんど動詞の過去形を使用している。N1, 2の調査協力者数が少ないため使用傾向ははっきり見えないが、N3, N4の場合は、この結果から「結果残存のテイル」の定着はまだ出来ていないと言える。問題2ではレベル問わず、テイル形の使用が多く、N3, N4レベルのBPSにとっても「開いている」の使用は他の動詞より定着していると考えられる。一方、問題3ではN3, N4レベルのBPSはテイル形ではなく、「人がいる」を使用し、また「テイルNがある」の使用はわずかだが、他の場面より多い。NSにも「残っている人がいる」「働いている人がいる」という使用が目立つ。これは、場面の設定が「電気がついている」より「人がいる」、つまり、電気がついていることが人の存在を指しているため、こういう結果が出たと思われる。しかし、BP版の結果を見ると、「テイルNがある」の使用例が一番多く、異なる場面の設定で「ついている電気がある」という言い方がBPSにとって自然であるかどうか再確認する必要があるという結論にたどり着いた。

BP版の結果から、BPSには「テイルNがある」の方が自然であり、レベルを問わず母語の影響で状態より存在の感覚が強いため、日本語で発話しても違和感を抱きにくいと思われる。そこで、BPSにとって「テイルNがある」はどの程度自然な言い方なのかを確認するために文法性判断調査を行った。

3-4 文法性判断調査の概要

2016年9月に文法性判断調査を実施した。NS 30名とブラジル（サンパウロ）のある一般人向けの日本語学校、サンパウロ大学とブラジリア大学在学中のBPSを合わせ、96名（日本語能力試験N4レベル以上：N1-18名、N2-20名、N3-26名、N4-32名）を対象とし、アンケートに答えてもらった。BPSが母語でどのように考えているのかが分かるように、1つの問題について、設問を日本語で書いたものと、BPで書いたものの2種類を準備し、答えてもらった。また、カウンターバランスを取るために、BP版を行ってから、日本語版を行う組と日本語版を行ってからBP版を行う組に分けて行った。

稲垣(2010)の調査をモデルにし、文法性判断タスクを用いてデータを収集した。各問題の右隣には4段階のリッカート尺度があり、調査協力者にそれぞれの文がどの程度自然であるかを判断するよう指示した（図5）。

	不自然		自然	
a. あ！あそこについている電気があるよ！消しておいて	1	2	3	4
b. あ！あそこについて電気があるよ！消しておいて	1	2	3	4

<図5 調査で用いた問題の例>

4-5 文法性判断調査の結果

BPSにとって「テイルNがある」はどの程度自然な言い方なのかを確認するために、アンケート調査で用いた4つの場面を提示し、自然か不自然かを選んでもらった。アンケート調査ではBPSのレベルによって「テイルNがある」だけではなく、「タNがある」の使用もあったため、文法性判断調査では両方のパターンを用いた。BPSのそれぞれのレベルを厳密に見るため、全問題の平均値の差、問題別の平均値の差を分散分析により検討した。最後に、NSは同じ4つの場面に対してどのように感じるのかを比較するため、同じ文法性判断アンケートに答えてもらい、結果を2要因分散分析（混合計画）によって検討した。以下の図6～9は調査で用いた問題である。表5～9はそれぞれの日本語版とBP版の問題の結果であり、表10と11は全問題の合算結果である。表中のMeanは平均で、SDは標準偏差を表している。

【問題1】

設問1： あ！あそこについている電気があるよ！消しておいて。

設問2： あ！あそこについて電気があるよ！消しておいて。

設問1： Ah! Ali tem uma luz acesa! Apaga por favor.

設問2： Ah! Ali tem uma luz que acendeu. Apaga por favor.

<図6 調査で用いた問題1>

<表5 問題1の結果>

問① 設問→	日本語版の回答				BP版の回答			
	テイルNがある		タNがある		テイルNがある		タNがある	
レベル↓	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
N1 (n=18)	3.50	0.83	2.00	0.94	3.89	0.31	1.78	0.85
N2 (n=20)	3.75	0.54	1.65	0.79	3.95	0.22	1.50	0.81
N3 (n=26)	3.38	0.79	2.50	1.15	3.81	0.39	1.58	0.88
N4 (n=32)	3.41	0.82	2.63	0.99	3.78	0.60	1.91	0.84
NS (n=30)	2.00	1.13	1.20	0.40				

表はBPSの日本語回答とBP回答、そしてNSの回答の問題1の平均と標準偏差を示したものである。日本語回答では2要因分散分析（混合計画）を行った結果、交互作用が有意であった（ $F(4,121)=3.98, p<.01$ ）。そこで、設問別にレベルの単純主効果を検定したところ、どちらも1%水準で有意だった（テイルNがある： $F(4,121)=14.70$ 、タNがある： $F(4,121)=10.24$ 共に $p<.01$ ）。Bonferroni法を用いた多重比較の結果、以下のようになった。

<表6 問題1の多重比較の結果>

設問	レベルの平均間の差	MSe
テイルNがある	N1, N2, N3, N4>NS	0.7779, $p<.05$
タNがある	N3, N4>N1, N2>NS	0.8211, $p<.05$

他の設問でのレベル間の平均の差は有意ではなかった。また、レベル別に設問の単純主効果を検定したところ、全レベルとNSでは1%水準で有意であった (N1 : F (1,121)= 26.83, N2 : F (1,121)= 52.59, N3 : F (1,121)= 9.33, N4 : F (1,121)= 7.28, NS : F (1,121)= 7.63共に $p<.01$)。

この結果から動詞「つく」の使い方に関して、N1とN2のBPSにとっては「ついている電気がある」という言い方は自然で、「ついた電気がある」は不自然であり、N3とN4のBPSにとっては、「ついている電気がある」は自然であるが、「ついた電気がある」という言い方もやや自然であることが分かった。さらに、NSにとって、いずれの設問も不自然であるが、「タNがある」は「テイルNがある」より不自然ということが分かった。

一方、BP回答では2要因分散分析（混合計画）を行った結果、設問1と2の主効果のみが有意であった (F (1,92)= 513.11, $p<.01$)。設問1と2の平均を比べると、設問1、「ついている電気がある」の方が高く、BPでは最も自然な言い方であると言える。

【問題2】

(あなたは新しいコップセットを買いました。箱を開けたら...)

設問1： あ！割れているコップがある！いやだな。

設問2： あ！割れたコップがある！いやだな。

Você comprou um jogo de copos. Ao abrir a caixa...

設問1： Ah! Tem um copo quebrado! Que droga...

設問2： Ah! Tem um copo que quebrou! Que droga...

<図7 調査で用いた問題2>

<表7 問題2の結果>

問② 設問→	日本語回答				BP回答			
	テイルNがある		タNがある		テイルNがある		タNがある	
レベル↓	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
N1 (n=18)	3.39	0.95	3.28	1.04	3.94	0.23	2.72	0.80
N2 (n=20)	3.55	0.74	3.40	0.86	3.95	0.22	2.85	0.91
N3 (n=26)	3.35	0.96	3.38	0.84	3.92	0.27	2.46	1.08
N4 (n=32)	2.66	1.11	3.59	0.82	3.97	0.17	2.84	0.91
NS (n=30)	3.03	1.02	3.23	1.05				

表はBPSの日本語回答とBP回答，そしてNSの回答の問題2の平均と標準偏差を示したものである。日本語回答では2要因分散分析（混合計画）を行った結果，設問1と2の主効果が有意ではなかった。しかし，設問別にレベルの単純主効果を検定したところ，「テイルNがある」では5%水準で有意だった（ $F(4,121)=3.01, p<.05$ ）。さらに，レベル別に設問の単純主効果を検定したところ，N4では1%水準で有意だった（ $F(1,121)=9.73, p<.01$ ）。最後に，Bonferroni法を用いた多重比較の結果，「テイルNがある」ではN2の平均がN4の平均よりも有意に大きい（ $MSe=1.0025, p<.05$ ）が，「タNがある」では全レベルの平均間の差は有意ではなかった。要するに，レベルを問わず，BPSにとって「つく」と異なり，動詞「割る」の場合は「割れているコップがある」と「割れたコップがある」のどちらも自然であり，N4レベルのBPSは「テイル」より「タNがある」の方が自然と思う傾向があると言える。また，NSにとっても，どちらの設問もやや自然であることが分かった。

BP回答では2要因分散分析（混合計画）を行った結果，設問1と2の主効果のみが有意であった（ $F(1,92)=145.60, p<.01$ ）。問題1と同じように，設問1，「割れているコップがある」がBPでは最も自然な言い方であるということが分かる。

【問題3】

設問1： あ！あそこに死んでいる犬がいる...かわいそう。

設問2： あ！あそこに死んだ犬がいる...かかいそう。

設問1： Ah! Ali tem um cachorro morto... tadinho.

設問2： Ah! Ali tem um cachorro que morreu... tadinho.

<図8 調査で用いた問題3>

<表8 問題3の結果>

問③ 設問→	日本語回答				BP回答			
	テイルNがある		タNがある		テイルNがある		タNがある	
レベル↓	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
N1 (n=18)	3.56	0.83	3.06	1.13	3.89	0.46	2.33	0.88
N2 (n=20)	3.15	1.19	3.10	1.14	4.00	0.00	2.30	1.01
N3 (n=26)	2.62	1.15	3.38	0.92	3.81	0.48	2.96	0.98
N4 (n=32)	2.19	1.16	3.63	0.70	3.88	0.33	2.59	1.03
NS (n=30)	3.03	1.02	3.00	1.15				

表はBPSの日本語回答とBP回答，そしてNSの回答の問題3の平均と標準偏差を示したものである。日本語回答では2要因分散分析（混合計画）を行った結果，交互作用が有意であった（ $F(4,121) = 5.07, p < .01$ ）。そこで，設問別にレベルの単純主効果を検定したところ，「タNがある」では有意ではなかったが（ $F = 1.61$ ），「テイルNがある」では1%水準で有意だった（ $F(4,121) = 5.35, p < .01$ ）。Bonferroni法を用いた多重比較の結果，「テイルNがある」ではN1とN2とNSの平均がN4の平均よりも有意に高い（ $MSe = 1.2313, p < .05$ ）。また，レベル別に設問の単純主効果を検定したところ，N3では5%水準で有意であり（ $F(1,121) = 5.03, p < .01$ ），N4では1%水準で有意だった（ $F(1,121) = 17.58, p < .01$ ）。

この結果から，「死ぬ」の使い方に関してはN1とN2のBPSにとっては「死んでいる犬がいる」は自然であるが，「死んだ犬がいる」という言い方もやや自然であり，N3とN4のBPSにとっては，「死んだ犬がいる」という言い方は自然で，「死んでいる犬がいる」は不自然であるということが分かった。最後に，NSにとって，問題2と同じように，いずれの設問もやや自然であることが分かった。

BP回答では2要因分散分析（混合計画）を行った結果，設問1と2の主効果のみが有意であった（ $F(1,92) = 128.36, p < .01$ ）。問題1と2と同じパターンで，「テイルNがある」がBPでは最も自然な言い方であると言える。

【問題4】

- まだ残っているケーキがあるけど，誰か食べる？
- まだ残ったケーキがあるけど，誰か食べる？

設問1： Ainda tem bolo sobrando. Alguém quer comer?

設問2： Ainda tem bolo que sobrou. Alguém quer comer?

<図9 調査で用いた問題4>

<表9 問題4の結果>

問④ 設問→	日本語回答				BP回答			
	テイルNがある		タNがある		テイルNがある		タNがある	
レベル↓	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
N1 (n=18)	3.67	0.75	2.39	0.89	3.83	0.37	3.06	0.85
N2 (n=20)	3.40	1.02	2.95	1.07	3.80	0.68	3.25	0.77
N3 (n=26)	3.12	0.85	2.88	1.01	3.62	0.79	2.62	1.08
N4 (n=32)	2.97	1.02	3.19	0.88	3.75	0.56	2.69	0.98
NS (n=30)	3.37	0.95	2.40	1.17				

表はBPSの日本語回答とBP回答，そしてNSの回答の問題4の平均と標準偏差を示したものである。日本語回答では2要因分散分析（混合計画）を行った結果，交互作用が有意であった（ $F(4,121)=3.59, p<.01$ ）。設問別にレベルの単純主効果を検定したところ，「テイルNがある」では有意ではないが，「タNがある」では5%水準で有意だった（ $F(4,121)=2.80, p<.05$ ）。Bonferroni法を用いた多重比較の結果，「タNがある」ではN4の平均がNSの平均よりも有意に高い（ $MSe=1.0740, p<.05$ ）。また，レベル別に設問の単純主効果を検定したところ，N1では1%水準で有意であったが（ $F(1,121)=16.70, p<.01$ ），NSでは5%水準で有意であった（ $F(1,121)=9.56, p<.05$ ）。

この結果から，N1のBPSには「残っているケーキがある」の方が自然であるのに対して，N4レベルのBPSは他の問題と同じように「タNがある」，問題4の場合では「残ったケーキがある」の方が自然ということが分かり，N2とN3レベルのBPSにとっては，「残る」に関してはどの言い方でも自然であることが分かった。そして，NSにとっては，「テイルNがある」はやや自然で，「タNがある」はやや不自然ということが分かった。

BP回答の2要因分散分析（混合計画）を行った結果，設問1と2の主効果のみが有意であった（ $F(1,92)=45.05, p<.01$ ）。この全問題は同じパターンを示し，「テイルNがある」がBPでは最も自然な言い方であることが明らかになった。

<表10 全問題合算結果>

全問	日本語版の回答				BP版の回答			
	テイルNがある		タNがある		テイルNがある		タNがある	
レベル↓	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
N1 (n=72)	3.53	0.85	2.68	1.13	3.89	0.36	2.47	0.97
N2 (n=80)	3.46	0.93	2.78	1.18	3.93	0.38	2.48	1.10
N3 (n=104)	3.12	0.99	3.04	1.06	3.79	0.53	2.40	1.13
N4 (n=128)	2.80	1.13	3.26	0.95	3.84	0.46	2.51	1.01
NS (n=120)	2.86	1.15	2.46	1.27				

表10はNSとBPSの日本語の回答とBPの回答のそれぞれの全問題の平均と標準偏差を示したものである。日本語回答の2要因分散分析（混合計画）を行った結果、交互作用が有意であった（ $F(4,499) = 9.45, p < .01$ ）。そこで、設問別にレベルの単純主効果を検定したところ、どちらも1%水準で有意だった（テイルNがある： $F(4,499) = 9.78$ ，タNがある： $F(4,499) = 7.42$ ，共に $p < .01$ ）。Bonferroni法を用いた多重比較の結果、以下のようになった。

<表11 全問題合算の多重比較の結果>

設問	レベルの平均間の差	MSe
テイルNがある	N1, N2 > NS, N4	1.0925, $p < .05$
タNがある	N4, N3 > NS, N1, N2	1.2580, $p < .05$

他のレベルとNSの平均間の差はどちらの設問でも有意ではなかった。また、レベル別に設問の単純主効果を検定したところ、N1, N2, N4では1%水準で有意であり（N1： $F(1,499) = 25.21$ ，N2： $F(1,499) = 16.60$ ，N4： $F(1,499) = 7.21$ 共に $p < .01$ ），NSでは5%水準で有意だった（ $F(1,499) = 5.62, p < .05$ ）。

この結果から全体的にN1とN2のBPSにとっては「テイルNがある」という言い方がもっとも自然で、N4のBPSにとっては「タNがある」という言い方が最も自然であることが分かった。また、NSにとっては、いずれも不自然であるが、「タNがある」は「テイルNがある」よりも不自然ということが分かった。

日本語回答の結果に対して、BP回答の2要因分散分析（混合計画）を行った結果、設問1と2の主効果のみが有意であった（ $F(1,380) = 524.19, p < .01$ ）。設問1と2の平均を比べると、設問1、つまり、「テイルNがある」の方が高く、BPでは最も自然な言い方であると言える。

4-6 文法性判断調査の結果の分析

BPSにとっては「テイルNがある」はどの程度自然なのかについて、4つの問題を通して、全問題の平均値の差と問題別の平均値の差を分散分析により検討した。最後にNSは同じ問題に対してどのように思うのかを比較するため、同じ文法性判断アンケートに答えてもらい、結果を2要因分散分析（混合計画）によって検討した。その結果、日本語版の調査ではNSは場面によって「テイルNがある」はやや自然だと判断しているのに対して、BPSの場合は全体の結果でも問題別の結果でも、いずれの動詞も「テイルNがある」は自然であることが分かった。

BP版では「テイルNがある」が最も自然という結果が出たにもかかわらず、日本語版の方では、レベルが低ければ低いほど、特にN4には、「テイル」より、「タNがある」という言い方が最も自然であることが明らかになった。この理由の一つとして、「テイル」の習得段階の観点から考えると、N4には、動作の継続を表す「テイル」の感覚がまだ強く、4つの場面の「テイル」を動作の継続として解釈したと思われる。それに対して、N1とN2の結果を見ると、「テイル」のそれぞれの意味と使

い方が定着していると思われるレベルでは期待されるのNSと一致する結果であったが、「テイルNがある」と「タNがある」に対する判断はBP版の結果と一致し、前者はどんな場面でも自然で、後者は不自然ということが明らかになったため、母語の影響があると考えられる。

このように、BPSにはレベルを問わず「テイルNがある」という言い方は自然であることが分かったが、全体的に「テイルNがある」か「タNがある」という使用はレベルによって分かれる。それに対して、BP版の結果でわかるようにBPでは「テイルNがある」が最も自然である。これらの結果によって母語の影響と共に日本語力の影響もあるということが分かった。

また、NSの回答の結果をBPSの回答の平均と比べるとNSの全回答の平均は低くBPSにはNSよりも「テイルNがある」は自然と言える。しかし、問題別の結果から問題1（ついている電気がある）は不自然であるのに対し、問題2（割れているコップがある）3（死んでいる犬がいる）4（残っているケーキがある）はやや自然と、二つの傾向に分かれることが分かった。この結果から、BPSにはどの動詞でも「テイルNがある」が自然であるのに対して、NSには、問題2と4（コップとケーキ）では物を制限するまたは特定するのに「テイルNがある」は自然だと思われる。しかし、問題3（犬）では制限するまたは特定する場面ではない。そこで、庵(2010)による存在形と非存在形のテイルがあげられる。つまり、NSにとっては物を指す場面であれば（問題2：コップ、問題3：犬、問題4：ケーキ）、ある程度その物の存在も表しているため、「テイルNがある」は場面によって自然であると思われる。一方、物を指さない場面（問題1：電気）の場合は「テイルNがある」は不自然である。

このように、調査の結果から、NSにとっても、場面によって「テイルNがある」は自然であることがわかった。しかし、上述したようにこれらの場面はBPでは不定冠詞を用いるため、BPSは日本語で話しているときでも、動詞 “ter”（ある）を使う必要性を感じるのではないかと考えられる（cf. “tem uma luz acesa” 「ついている電気がある」）。したがって、母語の影響でその使用場面の判断は難しく、場合によってNSが違和感を覚える発言をしてしまう可能性があるのではないかとと思われる。

5 おわりに

以上、本稿ではBPSにおける「テイルNがある」の使用傾向を明らかにし、母語の影響による特徴を考察した。日本語の「結果残存のテイル」とBPの「estar+過去分詞」が基本的に対応するため相対的に習得は困難ではないが、冠詞の影響により違いが見られた。BPでは不定冠詞を用いる文であれば、存在と所有を表す「ter」（在る）が使われており、「ter+過去分詞」は自然である。それを日本語にすると「テイルNがある」となり、BPSは母語の影響により自然・不自然な使用場面の判断が難しく、どんな場面でも「テイルNがある」は自然であると思ってしまうことが分かった。

しかしながら、今回の調査では問題項目数が少なかったため、十分に実証できていないと思われる。その上、各問題文の様々な性質に影響を受けている可能性が排除できない。今後は問題文を増やして改めて調査を行う必要があると思われる。

日本語には冠詞がないと言われているが、冠詞を持つ言語を母語とする日本語学習者は大勢いることから、BPSのための日本語教育を考えるにあたってBPにおける冠詞の知識が重要なのではないかとということが調査の結果からもわかった。冠詞を考慮することによって「結果残存のテイル」の理解と産出がより容易になると思われる。

文法性判断調査でのNSの結果から場面によって「テイルNがある」に関する感覚はBPSの冠詞の感覚と共通している点があるのではないかと考える。その共通点が実際に存在するかどうか、さらに調査を行い、今後検討したい。

参考文献

- 庵功雄 (2010) 「第1回 アスペクトをめぐって」『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号, 中国語話者のための日本語教育研究会編, 41-48.
- 稲垣俊史 (2013) 「テイル形の二面性と中国語話者によるテイルの習得への示唆」『中国語話者のための日本語教育研究』第4号, 中国語話者のための日本語教育研究会編, 29-41.
- 彌永史郎 (2011) 『新版ポルトガル語四週間』大学書林.
- 儀保ルシーラ悦子 (2014) 「ブラジル・ポルトガル語のアスペクト・テンス体系ー日本語のアスペクト・テンス体系との比較研究」『ロマンス語研究47号』, pp.1-10, 日本ロマンス語学会.
- 黒野敦子 (1995) 「初級日本語学習者における「ーテイル」の習得について」『日本語教育』87, 153-164.
- 陳昭心 (2009) 「「ある／いる」の「類義表現」としての「結果の状態のテイル」ー日本語母語話者と中国語を母語とする学習者の使用傾向を見てー」『世界の日本語教育』, 国際交流基金.
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版.
- トッフオリ・ジュリア (2019) 「ブラジル・ポルトガル語を母語とする日本語学習者の結果残存のテイルの使用傾向ー一定冠詞と不定冠詞による影響」『一橋大学国際教育交流センター紀要』創刊号, 一橋大学国際教育交流センター, 29-40.
- Hinds, John (1986) *Situation vs. Person Focus*.くろしお出版